

歴史地震探索

まちあるきガイド その2

半田市役所～住吉町・半田口編



半田市役所

半田市役所の敷地内には「東南海地震被災の地」の碑があります。現在の半田市役所の場所は、もとは昭和東南海地震で多数の犠牲者を出した中島飛行機山方工場があった場所で、碑の側面には「中島飛行機山方工場跡」「一九四四・一・二・七 学徒従業員など犠牲者一五三人」と刻まれています。

なお、半田市役所では、最新の免震システムを導入した新庁舎が平成26年12月に完成しています。(平成28年2月頃に外構工事が終了し、西側に碑が設置される予定です。)



名鉄知多半田駅からは、東口を出てロータリーを右手に見て進みます。(photo1)



しばらく進むとJRの高架をくぐり、すぐ左に曲がるとJR半田駅です。半田駅の前を過ぎ、NTTのアンテナを見ながらもう少し進みます。(photo2)



右手に広い通りが見えてきたら曲がります。(photo3)。広い通りをずっと進むと橋があり、渡ると市役所です。

庁舎には、大規模地震時にも防災拠点として継続使用できるよう免震構造が採用されており、地震の規模に応じて作動する「接続型スイッチダンパー」という最新のシステムが導入されています。



半田運河と蔵のまち

半田の中心地は、阿久比川の氾濫によって堆積した土からなる土地で、近世以降に人々が住み街が成立してからは、度重なる氾濫による洪水に悩まされてきました。江戸時代初期には、治水のために阿久比川を現在のように90度に屈曲させて衣浦へ流し、十ヶ川、五番川も開削されますが、運河が現在の姿になったのは、安政2(1855)年の大水害のあとです。

この安政2年の大水害のときには、阿久比川が大氾濫し、十ヶ川、五番川も各所で堤防が切れ、半田周辺で非常に大きな被害が出ました。これを受けて、それまで東進していた十ヶ川と、山方新田の中を流れていた五番川を南に流し、船入江に接続する工事が行われます。工事を主導したのは、ミツカンを創業した中野家の三代目・中野又左衛門で、多大なる尽力の結果、山方新田の一部を幅32m余り、長さ560m余りにわたって開削し、十ヶ川と五番川をまとめて新しい船入江(半田運河)に流し込むようにしました。

この大改修は治水と海運の両面の課題を一挙に解決した大事業となり、半田は海運を生かし、醸造業に代表される黒板囲いの蔵が建ち並ぶ蔵のまちとして、ますますの発展を遂げてきたのです。



「半田運河の会」HPより

蔵のまちエリアMAP



ミツカンミュージアム

ミツカンミュージアムは、文化元（1804）年創業のミツカンの歴史や技術などに触れ、楽しみ、学べる博物館です。館内は、江戸時代の酢づくりや現在の醸造の様子を見ることができる「大地の蔵」、懐かしい写真と音の演出から半田の情景や人々の息吹を感じることができる「風の回廊」、ミツカンの変革と挑戦の歴史をたどる「時の蔵」、四季の中の食といのちのつながりを表現した「水のシアター」、おすしやお鍋をテーマにした体験を通じて、食の魅力を楽しく学ぶことができる「光の庭」の5つのゾーンで構成されています。



市役所前の信号を渡り広い通りを川のほう（西）へ進みます。ミツカンの社屋が遠くに見えます。（photo1）



川のところまで来ました。源兵衛橋を渡ります。ミツカンの社屋もだいぶ大きく見えてきました。（photo2）



橋を渡るとすぐ左手に川沿いに進む歩道があります（photo3）。歩道を下り、右手に回り込むとミュージアムの入口があります。



小栗家住宅

小栗家住宅は、醸造業などを営んでいた半田の豪商・小栗家によって明治時代初期に建築された店舗兼住宅で、半田で大きな被害の出た昭和東南海地震を経験した建物です。主屋は椽瓦葺、寄棟造の木造2階建の東西に細長い建物で、道路に面した東側は店舗部分にあたり、奥には広大な居客部分が控えています。



平成16年3月には主屋始め8件が国の登録有形文化財に指定されています。また、平成18年から平成26年にかけて、1階部分は「蔵のまち観光案内所」として利用されていました。



ミュージアムを出て右手に進むとミツカンの社屋の一角が見えます。すぐ右に曲がり、「中笠銀行跡」広場を左手に見ながら進みます。（photo1）



再び先ほどの大通りにぶつかります。正面に蔵のまちカフェが見えます（photo2）。



横断歩道を渡り、蔵のまちカフェの左脇の道を入ります（photo3）。まもなく左手に小栗家住宅が見えてきます。



半六庭園（中埜半六邸）

中埜半六家は海運業や醸造業で財を成した半田の富豪で、10代目中埜半六が明治22（1889）年に半田運河沿いに建設した本宅が中埜半六邸です。2階建ての母屋と離れ、蔵、庭などが残されており、半田の繁栄の歴史を伝える貴重な建物と言えます。明治22年は第1回陸軍大演習が行われた前年であり、内部には天皇の一行を迎えるためのしつらえも見られます。3,000㎡あまりの敷地を半田市が整備し「半六庭園」と名付け、平成27年4月から、市民の憩いの場・半田市を訪れる方々のおもてなしの場として開園しています。



小栗家住宅の前の細い道をさらに進んでいきます。(photo1)

すぐに右手に壮大な屋敷が見えてきます。そのまま堀に沿って進みます。(photo2)



堀の先に立派な門が見えてきます(photo3)。半六庭園の入口です。



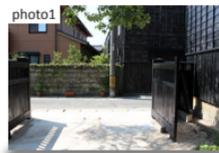
開園時間
午前9時から午後5時
開園日
土曜日・日曜日・祝日
(平成27年10月時点)



くにざかり 國盛酒の文化館

國盛酒の文化館は、日本酒の知識と理解を深めるとともに、省力化、機械化で使われなくなった道具や、先人たちの技などの貴重な文化遺産の伝承を目的としたお酒の博物館です。重厚な黒塗りの壁と白い漆喰窓をもつ建物は、200年にわたって酒造りが行われた酒蔵をそのまま活かしており、当時を再現した見学スペースとなっています。

館内では、お酒についての知識が学べるほか、^{かわりがしへまごころ} 利き酒もできます。また、ラベルにも使われている河東碧梧桐の『國盛』の書も見ることができます。(入館料は無料ですが、電話予約が必要です。)



半六庭園の門(photo1)を出て右に進みます。

すぐに路地の交差点にさしかかり、右手に黒壁の蔵が見えてきます。(photo2)



右に入ると国盛酒の文化館の入口があります。(photo3)



開館時間
午前10時から午後4時
休館日
木曜日・お盆・年末年始

※要予約



えんしょういん 光照院

光照院は「はんだ蔵のまち八景」のひとつにもなっている西山淨土宗のお寺で、地藏堂には千体地藏が、境内には交通安全祈願の六地藏尊が車座に祀られています。

この光照院に、昭和26年、半田市内で生き残った同級生達が昭和東南海地震の七回忌を期して「追憶之碑」(P.13 参照)を建立し、同時に柴山清風による常滑焼の「おほなみ観音」と呼ばれる十一面観音像が納められました。その後、平成6年に追憶之碑は雁宿公園に移転されています。(おほなみ観音は通常非公開)



国盛酒の文化館を出て、正面の細い道に進みます。(photo1)

右手に業葉神社が見えてきます(photo2)。そのまま進みます。



やがて右手に光照院の山門が見えてきます。(photo3)



千体地藏と六地藏尊



旧中荏家住宅

旧中荏家住宅は、江戸時代から海運業、醸造業で栄え、代々地元の発展に貢献した名家・中荏半六家の別邸として明治44(1911)年に建築された洋館で、国の指定重要文化財です。設計は旧名古屋銀行本店(現在の三菱東京UFJ銀行貨幣資料館)や5代中荏又左衛門が設立した中荏銀行本店も手掛けた建築家・鈴木禎次によるもので、木造レンガ造の2階建、飾り窓やバルコニー、ハーフティンバー様式の外観が明治・大正の浪漫を感じさせます。(平成28年3月まで耐震改修中、写真は改修前(半田市観光ガイドWEB HPより))



光照院を出て右手に進むとすぐ対向2車線の道にぶつかります(photo1)。ここを右に曲がります。



すぐの本町7丁目の信号を左に曲がります。角は半田商工会議所です。しばらく進むと踏切があります。奥には中荏又左衛門邸が見えます。(photo2)



左手に公園のある信号(photo3)を左に曲がります。すぐ左手が旧中荏家住宅です。



本町7丁目の交差点角の半田商工会議所には、「伊勢湾台風浸水水位」の表示があります。(敷地南東の扉)

ミツカンの創業家・中荏又左衛門邸です。三代目は安政の地震・水害のあと、本部の屋敷を移設する工事を行い、村人たちの仕事を作りました。(写真は正面)

雁宿公園

雁宿公園は、明治23(1890)年に陸海軍連合大演習が衣浦湾で行われた際、大本營が半田に置かれ明治天皇が訪れたことを記念して大正2年に整備された公園で、半田の市街地や衣浦港が一望できます。園内には天皇の訪問を記念した明治天皇駐蹕碑のほか、新美南吉の記念碑、昭和東南海地震の慰霊碑などが置かれ、半田の歴史を感じる公園となっています。桜の名所としても有名で、春には美しい風情を見せるほか、小動物園もあり、屋久島ヤギやニホンザル、フラミンゴ、クジャクなどを観ることができます。



知多半田駅のほうに進むと、ピアゴがあり、ピアゴを越えたところに、線路を渡る小道があります。(photo1)



線路を渡り右に進むと、すぐに雁宿町1丁目の信号があります。ここを左に曲がります。少しずつ坂になってきます。(photo2)



なかなかきつい坂です。緩やかなカーブ(photo3)を過ぎ、しばらく行くと公園の入口が右手に見えます。



龍台院

龍台院では「伊勢湾台風被災死者各霊位」の碑を見ることができます。



追憶之碑

追憶之碑は、昭和東南海地震で亡くなった学徒動員の生徒達を追悼するため、昭和25年の七回忌に集まった同級生達が募金運動をして建立した碑です。表面には「追憶之碑」とあり、裏面には半田中学・半田高女・半田商業と半田・乙川・亀崎・成岩の各国民学校の「震災殉難学徒」48人の慰霊のために、同期生一同が建立するという趣旨が刻まれています。なお、碑の礎石には、中島飛行機山方工場の国旗掲揚台の組石が利用されました。



殉難学徒之碑

殉難学徒之碑は、昭和東南海地震で亡くなった中島飛行機半田製作所の動員学徒96名と山二航空成岩工場で亡くなった1名を追悼した碑で、昭和34年に完成しています。碑の表面には「殉難学徒之碑」と刻まれ、裏面には、「一切の希望を勝利にかけて兵器の増産に身も心も捧げていた学徒の尊い命が地震により失われた」ことが記され、慰霊の意が込められています。また、台座裏面には犠牲者の氏名が刻まれています。



半田・戦災犠牲者追悼平和祈念碑

半田・戦災犠牲者追悼平和祈念碑は、昭和東南海地震の犠牲者、昭和20年7月の空襲による犠牲者ら、合計432人以上を追悼したもので、すべての犠牲者の方の名前が刻まれています。地震による犠牲者の所属を見ると、従業員や徴用などの成人より動員学徒の犠牲者ははるかに多いことがわかります。碑は、動員体験者や市民の協力によって寄金が寄せられ、戦後50年を記念して平成7年7月に完成しました。



中島飛行機株式会社

中島飛行機株式会社は、戦前、戦闘機を作っていた航空機・エンジンメーカーで、半田には本工場、山方工場、^{よしの}葎野工場の3つの工場がありました。(地図は2,3ページ参照)

昭和東南海地震では、このうち山方工場、葎野工場で多くの建物が倒壊し、多数の死者が発生しましたが、一方で本工場ではほとんど被害が発生しませんでした。

山方工場、葎野工場はもともとは紡績工場であり、耐震性能の低いレンガ造であったことが倒壊の原因と考えられますが、戦争により耐震基準が廃止されていた中で、両工場は飛行機の増産体制に合わせて軍需工場に改造しており、建築構造上必要となる壁や柱を取り除いていたことで被害が拡大した、とも言われています。

軍需目的の飛行機生産が中心だった中島飛行機は、戦後、占領軍の命令で12社に解体され、技術者の多くは自動車産業へ転身し、日本の自動車産業の発展に多大な貢献をしています。

陸海軍連合大演習の碑

明治23(1890)年3月29日から4月3日にかけて、日本で最初の陸海軍連合大演習が衣浦湾で行われました。半田には、いまでもこの大演習にゆかりのある碑や史跡がたくさん残されています。明治天皇がその地から大演習を統監した雁宿公園には「明治天皇^{ちやうじつ}駐蹕碑(写真奥)」「明治天皇^{おのだてしよ}雁宿御立所(写真手前)」の碑が、また、乙川の白山公園内には「駐蹕御趾」「明治天皇乙川御立所」「明治天皇御統監四十周年記念碑(誓いの御柱)」の碑が建てられています。

なお、現在の国盛酒の文化館の敷地内にあった小栗富治郎邸(大本營となった建物は雁宿公園に移築)に明治天皇が、小栗家住宅(小栗三郎邸)には有栖川宮^{ありがきみや}熾仁親王が、それぞれ宿所を構えたことで有名です。



きたたに 北谷墓地

北谷墓地には、中島飛行機の後継会社である輸送機工業が東南海地震の犠牲者の慰霊のために建立した「殉職者諸精霊之碑」があります。

中島飛行機は、国策により戦争中の昭和20年4月に国有化され、戦後は占領軍の命令で解体されますが、国有化される前に昭和東南海地震の犠牲者を慰霊する「震災殉難者之塔」を建立しており、後継会社の愛知富士産業株式会社、輸送機工業株式会社がこれを引き継ぎ、石製の碑として残されているものが現在の殉難者諸精霊之碑です。

なお、この北谷墓地には新美南吉のお墓もあります。



photo1



公園の奥に小さな動物園があり、一番奥のフラミンゴ園の左に小道があります。(photo1)

photo2



小道を進み階段を下りると雁宿小学校の貯水池の横に出ます(photo2)。貯水池を左に見て進み、親池地蔵の角で左に曲がります。

photo3



右にカーブして信号を過ぎさらに進むと、右手に「←南吉の墓」の看板が見えるので、ここで左に曲がります。(photo3)



碑は10号地区直にあります。(下図参照)

墓地内

北谷墓地の入口左手には、伊勢湾台風の「鎮魂碑」もあります。敷地内には新美南吉の墓もあります。



角には親池地蔵



森の中で階段を下ります

地図データ ©2015 Google, ZENRIN

半田赤レンガ建物

明治 22 (1889) 年 5 月、中笠酢店 4 代目・中笠又左衛門、敷島製パン創業者・盛田善平らにより、「丸三ビール」と名づけられた瓶詰めビールが半田から初出荷されました。これが後のカプトビールです。半田赤レンガ建物は、カプトビールの工場として明治 31 年に建てられたレンガ建造物で、設計は横浜の赤レンガ倉庫も手掛けた明治建築界の巨匠・妻木頼黄によるものです。現在は耐震改修を経て展示室・イベントスペースとして利用されており、復刻したカプトビールを味わうことのできるカフェやショップも併設しています。



墓地を右に出て高校に沿うように進むと、先ほど通った道にぶつかります。ここを右に曲がります。(photo1)



終町 3 丁目東の信号で左に曲がり、広い通りを進みます。(photo2)



踏切を越え、道なりに進むと歩道橋が見えます(photo3)。歩道橋に案内があり、左手に建物が見えてきます。まちあるきお疲れ様でした。



半田赤レンガ建物

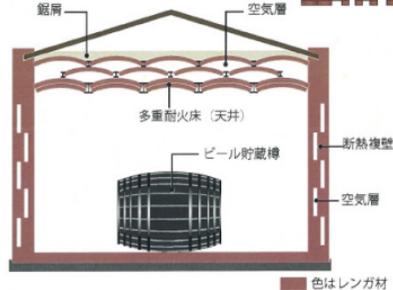
このページの内容は「半田赤レンガ建物―整備工事の記録―」(平成 27 年 7 月、清水建設株式会社名古屋支店 制作) より引用しています。

半田赤レンガ建物の主な特徴

- ①ビール工場として現存する数少ない建物で、中空構造の 5 重断熱複壁や耐火床を有する
- ②ハーフティンバー(木骨レンガ造)の美しい外観、安城市の岡田煉瓦製造所のレンガ使用
- ③戦争の遺構として、北面には米軍機(ムスタング)の機銃掃射痕が残る
- ④平成 16 年には国の登録有形文化財、平成 21 年には近代化産業遺産となる

断熱複壁・耐火床

外気に 2~5 層の空気層を設けることで、温度・湿度を一定に保つことのできるレンガ壁です。北側の 5 層複壁は、他に例のない珍しいものです。



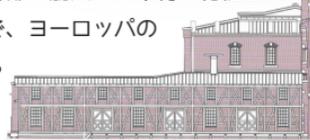
■色はレンガ材

耐震改修

耐震性を確保するために、平成 26 年から平成 27 年にかけて耐震改修が行なわれました。改修にあたっては、レンガ造りの外観意匠を変えないようにするため、壁の中に鉛直方向に孔を明け、鉄筋を挿入し、モルタルで固めるという、特殊な工法が用いられています。

ハーフティンバー

木材による柱・梁の骨組の間にレンガを積み壁とし、外部に筋交いの木材で化粧を施した構造で、ヨーロッパの住宅等に見られます。



ハーフティンバー部 卓立画製

設計者

設計者の妻木頼黄は、片山東熊(迎賓館など)、辰野金吾(東京駅など)と並ぶ明治建築界の三大巨頭で、横浜の赤レンガ倉庫や横浜正金銀行などを手掛けています。



新美南吉記念館

新美南吉記念館は、童話「ごんぎつね」の作者で半田市出身の児童文学者・新美南吉の顕彰を目的に、平成6年に設立された記念文学館です。作品原稿、日記、手紙などの資料に加え、6つの作品のストーリーを模型で紹介するジオラマ展示やビデオシアター、視聴覚コーナーなどが用意されており、南吉文学初心者の方や子どもたちにもわかりやすい展示となっています。また、周辺には南吉の生家、養家、作品舞台になった山川、社寺、彼が学んだ学校などがあり、それらを巡る文学散歩コースも整備されています。



photo1

photo2

photo3

殉難者諸精霊之碑を通り過ぎる方向に進みます (photo1)。奥の区画の裏側に階段があります。階段を下り道路に出ます。(右図参照)

道路を進むと信号があり広い通りにぶつかります (photo2)。右折して広い通りを進みます。

しばらく進むと左側に記念館への入口があります。(photo3)

地図データ ©2015 Google, ZENRIN

矢勝川

矢勝川は半田市と阿久比町の境を流れる二級河川で、新美南吉の「ごんぎつね」にも出てきた、兵十やごんがウナギなどを捕っていた川です。市民の手によって、ごんぎつねにも登場する彼岸花の植栽が平成2年から始められ、9月から10月にかけて堤防約1.5kmに、その数300万本とも言われる彼岸花が、真っ赤な絨毯を敷いたように咲き誇り、日本屈指の群生地となっています。南吉生誕の地・半田市岩滑地区では、この彼岸花の時期に合わせて「ごんの秋まつり」が催され、様々なイベントが開催されます。



photo1

photo2

photo3

記念館を出て建物沿いの道を進み、T字の交差点を過ぎると、左手に堤防に入る道があります。(photo1)

堤防を矢勝川沿いにカーブしながら進みます。季節により様々な花が彩ります。(photo2)

広い通りにぶつかったら(photo3)右に曲がり、しばらく行くと、名鉄半田駅があります。

まちあるきお疲れ様でした。

地図データ ©2015 Google, ZENRIN

おわりに

半田は古くから醸造業・海運業で栄え、歴史のある街並みが形成されていて、地震や風水害を耐え抜いた建物も数多く残されています。

一方で、昭和東南海地震の際には、紡績工場からの改造により結果的に耐震性を欠くこととなった飛行機工場で大きな被害が出ており、あらためて耐震性確保の重要性が浮き彫りになっています。また、運河の東側の地盤の悪い場所での被害が大きく、土地の条件が被害に関係することも感じ取ることができます。

半田の歴史ある街並みを眺めながら、自宅や親族の住まい、普段生活をしている場所などの土地や耐震性について、ぜひ一度、思いを巡らせてみてください。

さらに学びたい方は…

「地震体験記録集―関東大震災・東南海地震・三河地震―」（愛知県）、「半田の戦争記録―半田市誌別巻」（半田市）では、東南海地震を経験された方の当時の状況についての証言を読むことができます。「ばれいしょの青春～学徒動員日記四―八日～」には、戦争中に発生した東南海地震のことが動員学徒の目線から日記風に描かれています。また、NHKの戦争証言アーカイブス「封印された大震災～愛知・半田～」でも、東南海地震の記録が生々しく語られています。

そのほか、今日のまちあるきに関連して、半田出身の作家・澤田ふじ子が大演習を題材として書いた小説「世間の棺」（短編小説集『寂野』収録）も興味深い内容です。



歴史地震探索まちあるきガイドブックその2 ―半田市役所～住吉町・半田口編―

作成：減斎の会
名古屋大学減災連携研究センター
受託研究員 山本 真一郎（愛知県）

発行：名古屋大学減災連携研究センター

平成 27 年 10 月

まちあるきの感想や、ガイドに対するご意見などございましたら、
gensaisan2014@gmail.com までお寄せください。